平成１５年度　学力向上フロンティアスクール中間報告書

都道府県名	千葉県

Ⅰ．学校の概要　（平成１５年４月現在）

学校名	浦安市立堀江中学校				教員数
学　年	１　年	２　年	３　年	計	
学級数	５	５	５	１５	２８
生徒数	１７１	１８０	１７７	５２８	

Ⅱ．研究の概要

１．研究主題

自立をめざし、生き生きと学ぶ生徒の育成

～「確かな学力」の定着を図る教育課程と指導法の工夫～

２．研究内容と方法（平成１５年度の主な取組）

(1)実施学年・教科

○基礎・基本の定着を図る指導の工夫

①少人数習熟度別指導

・全学年数学および全学年英語

（生徒の理解度に差が出やすい教科であり、前年度までの研究成果と生徒に対する実態調査の結果から学年の枠を広げ、研究に取り組むため）

②基礎学力の向上をめざす取組

・全学年ＤＴ「ドリルタイム」（国・数・英）…読み・書き・計算・英単語の反復学習

○学び方の習得を図る指導の工夫

・全学年学習ガイド、学習シラバスの作成と活用

○課題解決力の育成を図る工夫

・２、３学年　ＭＴ（マイタイム）における課題解決的学習の実践

○学力向上に向けての実態把握

・全学年生徒および職員…学習と生活のアンケート、学力向上に関する意識調査

(2)年次ごとの計画

平成14年度

○テーマ　「確かな学力」を身につけ、生き生きと学ぶ生徒の育成

○仮説

・教科指導において、生徒の教科学力の実態にみあって、個に応じた少人数学習・習熟度別学習を取り入れて、指導すれば、基礎学力の定着をはかることができるであろう。

・選択履修方法の工夫や総合的な学習における体験活動などを計画的に実践することによって、多くの人との関わりが生まれ、共生する心を育むことができるであろう。

・選択履修幅の拡大充実を図れば、一人一人の個性を生かすことができるであろう。

○研究内容・方法

基礎学力の定着をはかる指導の工夫

① 各教科指導の研究

② 数学・英語における少人数学習

③ ＳＴ「セレクト・タイム」・ＣＴ「チャレンジ・タイム」での習熟度別少人数学習

個を生かし、共生の心を育む指導の工夫

① ＭＴ「マイ・タイム」での履修幅の拡大やゲストティーチャーの起用

② ＨＴ「ヒューマン・タイム」　総合的な学習における生き方学習や福祉学習の実践

上記の内容や方法を実践するにあたっての具体的な取組

①研究の基本方針立案…研究推進委員会

②現段階での実態把握

・学力分析（標準学力テストの結果から）…各教科部会

・家庭での学習および生活アンケートの実施（生徒・保護者）

③上記2点の相関分析・まとめ…研究推進委員会

④職員の学力向上に関するアンケートの実施

⑤今後３カ年を見通しての研究主題・研究計画の立案・検討・修正

⑥年間指導計画の立案・検討

・各教科・領域年間指導計画・評価規準作成…各教科部会

・選択教科（ＭＴ・ＳＴ・ＣＴ）年間指導計画・評価の観点作成

・総合的な学習年間指導計画作成・評価方法の検討

⑦授業研究

⑧それぞれの実践に対する考察・修正

平成15年度

○テーマ　自立をめざし、生き生きと学ぶ生徒の育成

～～「確かな学力」の定着を図る教育課程と指導法の工夫～

○仮説

以下の３点を研究ポイントとして、教育課程や指導法を工夫することにより、「確かな学力」の定着を図ることができるだろう。

①基礎・基本の定着

・各教科の基礎となる「読み・書き・計算」といった基礎学力の向上を図る取組に加え、各教科の基礎・基本を明確にし、指導計画・指導内容・指導方法・評価などを工夫すること

②学び方の習得

・学習習慣・学習態度・学習技術などを、しっかりと身につけさせるような取組を工夫すること

③課題解決力の育成

・習得した基礎・基本を基に、自分で課題を見つけ、考え、判断し、表現しながら、よりよく生きる力を身につけられるような体験的、また、課題解決的な活動を取り入れる工夫をすること

＊特に、①②について、重点ポイントとしたい。

○研究内容・方法

基礎・基本の定着を図る指導の工夫

①各教科指導の研究

②基礎学力の向上をめざす取組

③数学・英語における少人数指導（学習指導カウンセラー派遣に係る調査研究事業の指定）

学び方の習得を図る指導の工夫

①意欲的な学習集団作りの研究

②学習習慣を身につけさせる指導の研究

課題解決力の育成を図る工夫

①ＭＴ（マイタイム）における課題解決的学習の実践

②ＨＴ「総合的な学習の時間」における生き方学習の実践

上記の内容や方法を実践するにあたっての具体的な取組

①学習指導カウンセラー派遣に係る調査研究（平成15・16年度　文部科学省指定）

②実態把握の継続と変容の把握

・学力分析（千葉県標準学力検査の結果から）…各教科部会

・家庭での学習および生活アンケートの実施（生徒・保護者）

・上記2点の相関分析、まとめ

・職員の学力向上に関するアンケートの実施

③今後を見通しての研究主題、研究計画の立案、検討・修正

④年間指導計画の立案・検討

・各教科領域年間指導計画、評価規準作成…各教科部会

・選択教科年間指導計画、評価の観点の検討

・総合的な学習年間指導計画作成、評価方法の検討

⑤授業研究

⑥それぞれの実践に対する考察、修正

平成16年度

○テーマ　自立をめざし、生き生きと学ぶ生徒の育成

～「確かな学力」の定着を図る教育課程と指導法の工夫～

○仮説

以下の３点を研究ポイントとして、教育課程や指導法を工夫することにより、「確かな学力」の定着を図ることができるだろう。

①基礎・基本の定着

・各教科の基礎となる「読み・書き・計算」といった基礎学力の向上を図る取組に加え、各教科の基礎・基本を明確にし、指導計画、指導内容、指導方法、評価などを工夫すること

②学び方の習得

・学習習慣、学習態度、学習技術などを、しっかりと身につけさせるような取組を工夫すること

③課題解決力の育成

・習得した基礎・基本を基に、自分で課題を見つけ、考え、判断し、表現しながら、よりよく生きる力を身につけられるような体験的、また、課題解決的な活動を取り入れる工夫をすること

＊15年度の重点である①②の研究をさらに深め、③を重点として研究を進める。

○研究内容・方法

基礎・基本の定着を図る指導の工夫

学び方の習得を図る指導の工夫

課題解決力の育成を図る工夫

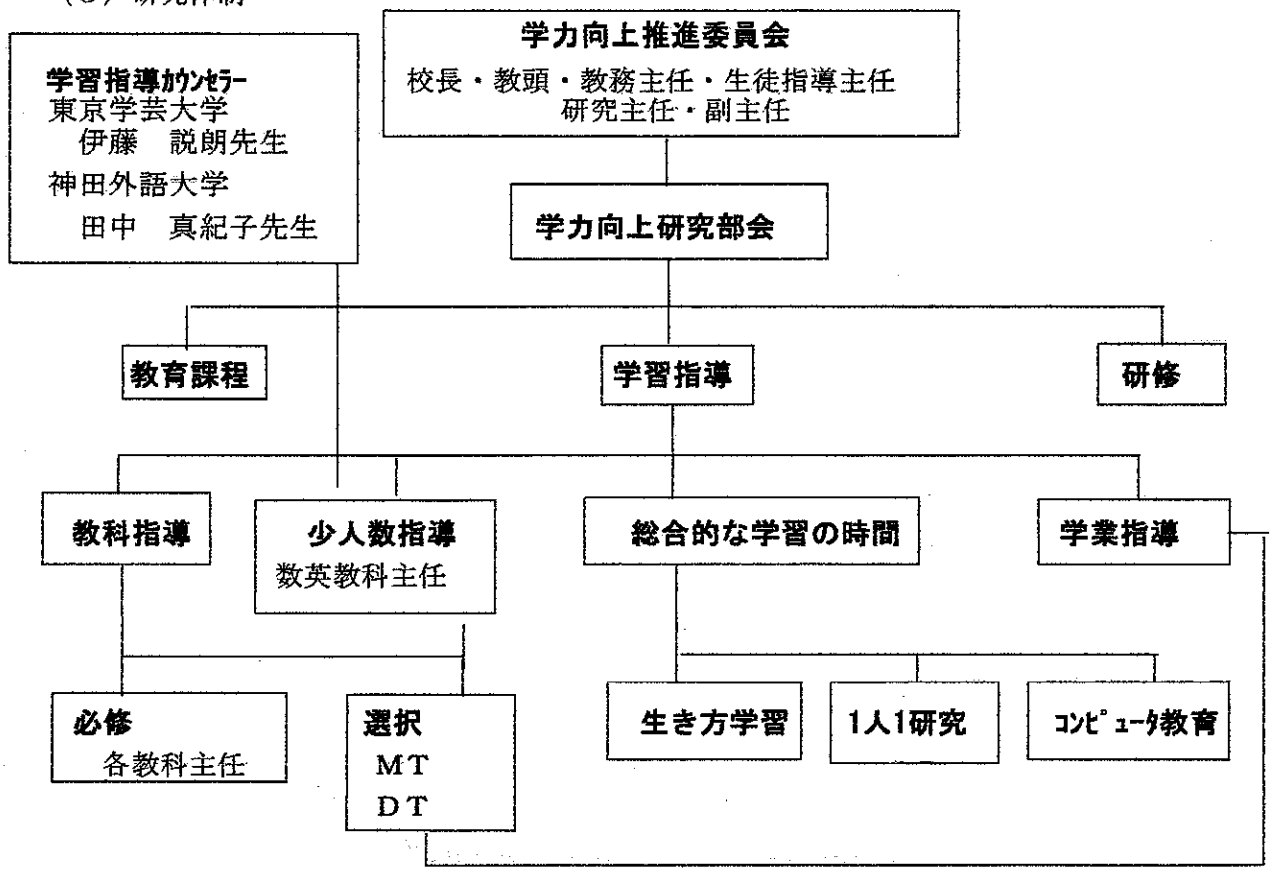
上記の内容を実践するにあたっての方法

①第２年次の課題に基づく研究内容・方法の修正

②第２年次の研究実践の継続と発展的実践研究

③学力向上に関する総括的評価

（３）研究体制



Ⅲ．平成１５年度の研究の成果および今後の課題

○基礎・基本の定着を図る指導の工夫

①「少人数習熟度別指導」

数学

ｉ　研究の成果

１クラスを母体とし、Ａ（基本）コースとＢ（標準・発展）コースの２コースに分け、各学年、数学科教員２名が指導にあたる。各単元の導入部分や共通理解が必要な基本的内容では、一斉（ＴＴ）授業、問題解決の内容など、生徒個々の能力差が出てくる内容では習熟度別の少人数授業を行うなど、学習内容に合わせて学習形態を変化させる工夫をする。

習熟度別にコースを設定する場合、基本・標準・発展の３コースが考えられる。しかし、前年度の反省や生徒の実態をふまえると、学級を母体としたコース編成が妥当であった。その結果１クラスを２コースに分ける方法をとることにした。

また、２コースの設定についても、前年度のコース内容や人数配分を検討し、基礎基本を重点にしたＡ（基本）コースと、”標準”に重きをおいたＢ（標準・発展）コースとし、その人数配分が、１：２程度になるようにした。

生徒は、コースを人間関係で選ぶのではなく、純粋に授業内容を理解したいと思って選んでおり、少人数による授業への取り組みも、とても前向きであった。

習熟度別・少人数の授業で、自分にあった学習ができたか、という生徒のアンケート（１学年対象に実施）によると、「とても思う・少し思う」と答えた生徒がＡコースで８７％、Ｂコースで９３％であり、ほぼ生徒が満足する授業を展開することができたと思われる。また、「あまり思わない」と答えた両コースの５％の生徒も、「質問しやすくなった」「わかるものが増えた」といった感想を述べており、ほとんどは、少人数の授業自体を肯定的に思っているといってよい。

アンケート結果

「数学」の授業で、クラスを少人数に分けて行ないましたが、自分にあった学習ができましたか。

		①とても思う	②少し思う	③あまり思わない	④全然思わない
A	計（人）	１２	２１	2	3
	(%)	**31.6**	**55.3**	**5.3**	**7.9**
B	計（人）	４１	６５	6	2
	(%)	**36.0**	**57.0**	**5.3**	**1.8**

① とても思う、②少し思う（主な意見）

「発表する機会が多くあってよかった」「よく分かった。分かりやすかった」「手が挙げやすい、意見が言いやすい」「質問がしやすくなった」「Ｂコースは、もう少し速くてもいい」

「楽しかった」「集中できた」「じっくり考えられた」「自分のペースにあっていた」

「おもしろい問題があった」「もっと難しい問題をやりたい」

②あまり思わない　③全然思わない（主な意見）

「Ｂコースの人数があまり減らなかった」「質問しやすくなったが、多くの人の考えが知りたい

「周りの人と自分を比べることでやる気がでるから」「難しかったけれど、分かるものは増えた」

また伊藤先生より、評価についての指導を受け、２学期と３学期に、それぞれ「学習内容と評価内容」についての資料をもとに（全学年・全教科で作成）、学期初めに生徒に説明する時間をとった。

その効果として、学習に見通しを持ち、積極的に授業に参加する生徒が増えた。コース分けの希望調査を行なう際にも、新しい単元やコース別の学習内容などを説明するようにすることによ

り、生徒は、自分の状態をより正確に判断し、コースを選択するようになった。今後も、「生徒一人ひとりに必要な学習」を心がけ、少人数による指導を工夫、実践していきたいと考える。

ii　課題

生徒の取り組みが前向きであったものの、1クラスを2コースに分けるというやり方には、やはり限界があると考える。基礎コースの人数を少なくしたことにより、下位の生徒への個別の対応は、少しずつできつつある。その反面、標準発展コースの生徒の中にも習熟度に差があり、一人ひとりに十分対応できているとはいいがたい状況にある。

学習指導カウンセラーの伊藤先生よりご指導いただいた、「3グループ制」を実施することが必要であり、使用する教室、時間割や担当教員の配置等、まだいろいろとクリアしなければならない問題もあるが、来年度実施に向けて、第一に検討していかなければならない。

英語

i　研究の成果

昨年度に引き続いて、少人数指導の効果的な推進を行いながら、英語の学習で身につけさせたい能力である、関心・意欲・態度（英語をつなぎ言葉や別の自分の知っている単語等を使いながら、途中であきらめずに最後まで話したり、書いたり、聞いたりしようとすること）や、英語を理解する能力（聞いて理解する力・読んで理解する力）、表現の能力（話して表現する力・書いて表現する力）、言語や文化に関する理解の能力（英語を使うときのきまりの理解・英語で手紙を書くときの形式等のきまりの理解等）の4つ能力の向上を図りたい。

堀江中学校の生徒たちは、この4つの能力のうち、特に、読んで理解する力と、書いて表現する力が他の能力に比べて低いことが標準学力テストの結果からわかる。そこで、書く・読み取る力をつけることに重点を置いて指導を工夫していくことになった。

また、指導と評価の一体化を図るために、集団に準拠した評価ではなく目標に準拠した評価である絶対評価を行っていることを、生徒・保護者に理解してもらうとともに、評価基準の見直しと観点別評価（各領域の達成度を評価するもの）をどのように総括していけば、最適な評定を出していけるのか考えていくことになった。

・コース編成の方法

2年生は、昨年度に引き続き週3回のうち2回が少人数習熟度別の2つのコース（Aコース：発展とBコース：基礎）に分けて指導することにした。残りの1時間は、ＡＬＴとＪＥＴ（日本人の英語教師）のティームティーチングとした。

1、3年生は、少人数（クラスを2つに分けて）の授業を週1時間にし、残りの2時間を、ティームティーチングの時間とした。少人数のクラスは、習熟度別ではなくて、生活班を主体とするものである。生徒同士の教え合いを推進し、ペアワークやグループでの発表などを円滑にかつ活発に行わせながら、相互の学力を向上させていくことをねらった。

単元が始まる前に、生徒1人1人に、教務部で準備してもらった「○学期の学習」の英語の部分を開かせて、この単元でのねらい、各時間ごとの目標について読み合わせを行った。このときに評価の仕方についても触れ、生徒1人1人が、毎時間ごとの目標と評価の仕方について確認することで、単元のおおまかな流れを把握することができ、1時間1時間を大切にする生徒が増えた。

書く能力についてであるが、Keypalsには、辞書機能がついているので、辞書を使うことなく、自分が知りたい言葉を和英辞典機能で探し出して英文に取り入れたり、自分が表現したい英文に関しては、教科書を利用して、既習の英文を使い、自分の表現したい文に作り替えながら返事を書いている生徒が多く見られた。個人のレベルにあわせて文章(e-mail) を「読み」理解を進めていったり、返事を英文で「書く」ことで書くための決まりである文法をはじめ、手紙のフ

ォームやe-mailのフォーム等の言語文化に対する理解も身につけていくことができたのではないかと思う。

個々の生徒たちが、自分の頑張り如何で作業が進むこと、時間内に仕上げてしまうためには、復習を確実に行っておき、家庭で準備しておくことも大切になる。この学習を進めていく中で、家庭での学習が以前よりも定着してきたようである(毎日ノートの点検の結果)。また、学習者全員の学習状況(コンピュータの画面)を把握できるので、学習が遅進している生徒に対しては、マザーコンピュータからメッセージを送ったり、書き換えた英文を送ったりと、教師が移動せずに細かな指導ができるので時間を有効に使って全員の英文に目を通すことができた。

アンケート結果(2学年)

(1) クラスを2つに分けて学習することはあなたにとってどうですか?

A 良い	(男:95%	:	女:93%)
B 良くない	(男: 4%	:	女: 7%)
C 変わらない	(男: 1%	:	女: 0%)

(2) 良いと答えた人の理由
- ノートやワークシートを先生が見て回る機会が多いので、緊張感があり良い
- 先生から指名されて英語で話す機会が増えた
- わからないところを先生にすぐ聞けて、アドバイスもすぐにもらえて良い
- 挙手をするとあてられる回数が増えたのでうれしい
- 英語の質問がいつ来るか予想できない緊張感があり集中できる

(3) 良くないと答えた人の理由
- 仲の良い友達と別れてしまいつまらない
- 自分の能力が低いのが他の人にわかり嫌だ
- 息を抜ける暇がなく疲れる

(4) 変わらないと答えた人の理由
- 大きいクラスでも小さいクラスでもよくできないので変わらない

ii 今後の課題

目標に準拠した評価は、学習指導要領に示す目標に照らして子どもの学習の到達度を適切に評価していくことが大切になってくる。つまり、教科の目標・内容に照らして、その実現状況がどの程度かという学習の習熟度や達成感を評価しなければならない。

観点別評価にある関心・意欲・態度は、授業への関心・意欲・態度ではなく、例えば、スピーキングにおいては、つなぎ言葉を使ったり、易しい英語の表現に直したりしながら、最後まであきらめずに、自分の言いたいことを最後まで表現できるか否かで評価されなければならないということになる。従って、文法(これは、言語・文化に関する能力になる)が少々間違っていても、最後まで努力して自分の英語の言葉で表現しようとしたならば、関心・意欲・態度はA評定となるのである。授業中の態度や忘れ物が、教科の観点別評価である関心・意欲・態度の評価の一端を担うこと自体が間違いなのだ。

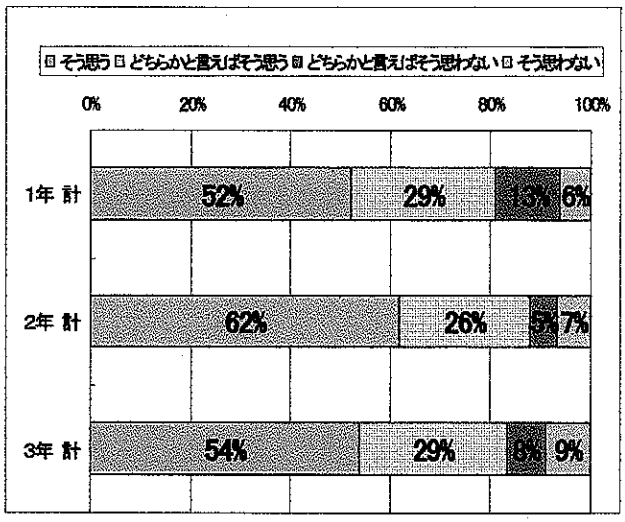
まだまだ「指導と評価の一体化」については生徒も保護者も、私たち教師もはっきりしていない部分がある。来年度は、指導の目標をさらに具体的に公表し、評価の規準や観点別の評価の方法も明確にして、生徒や保護者に提供し、共通理解を図りたい。

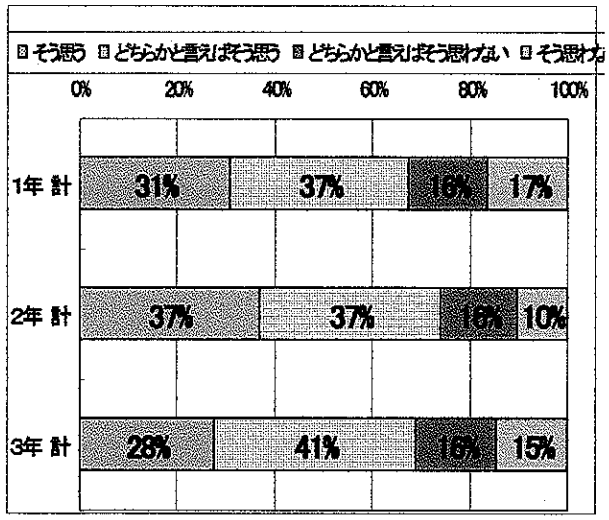
また、これらの評価を踏まえて、生徒1人1人の学力の向上のために、これらの評価結果が、次の学習指導の改善に活かせるように個別指導や補充学習にも力を入れていく必要があると思う。

資料　学習アンケート結果（全校生徒対象　平成 15 年 12 月実施）

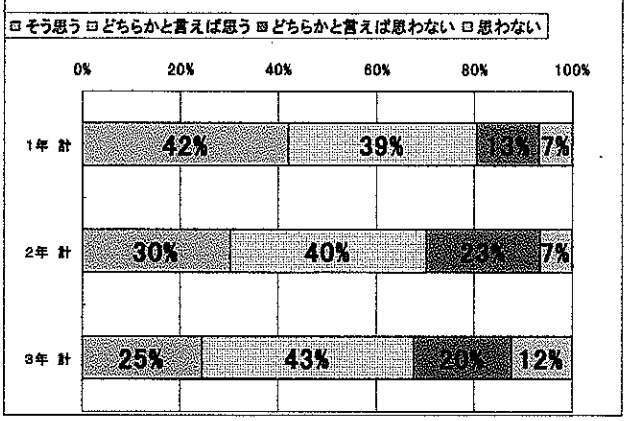
数学　　英語

クラスを二つに分けて行なう「少人数授業」で、授業内容がよくわかるようになりましたか？

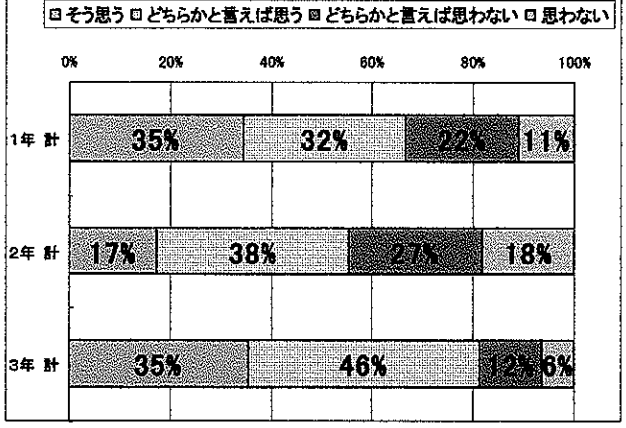




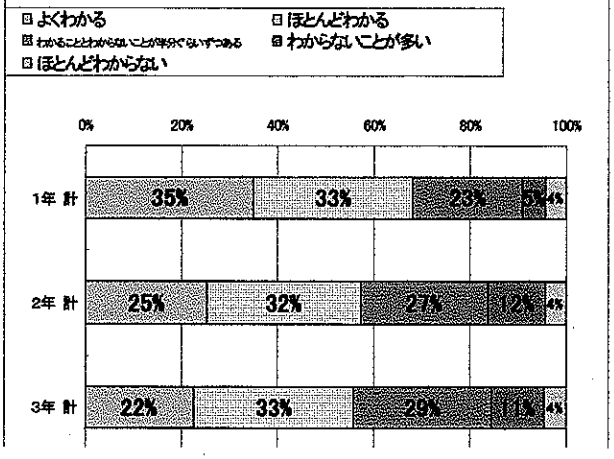
数学の授業が好きだ。楽しみだ。やる気がある。



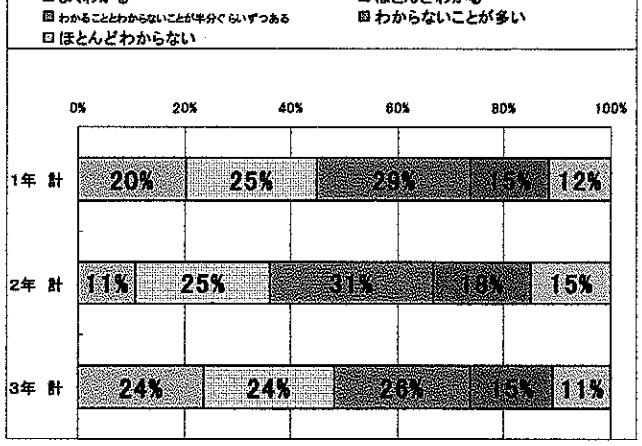
英語の授業が好きだ。楽しみだ。やる気がある。



数学の授業がどれくらいわかりますか？



英語の授業がどれくらいわかりますか？



②基礎学力の向上をめざす取組

「選択ＤＴ（ドリルタイム）」

本校生徒の学力向上を考える上で、教科学習の基となる読み書き計算の力を育てるために全校で取り組んだ。帰りの会が始まる前の 10 分間を漢字・計算・英単語の反復学習の時間に位置づけた。一週ごとに漢字・計算・英単語のサイクルで実施した。

一週間の流れ

月火水＝練習　　木＝確認テスト　　金＝確認テストに合格した者…発展テスト
不合格だった者…確認テストの再テスト

ｉ　研究の成果

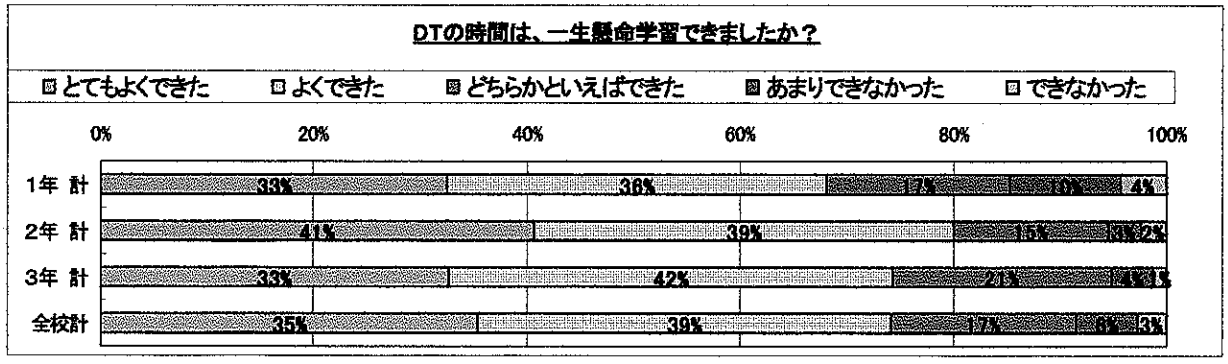
５月半ばから、各教科９週（２月末現在）実施した。課題は、各教科で担当を決め、校内で独自のドリルを作成している。

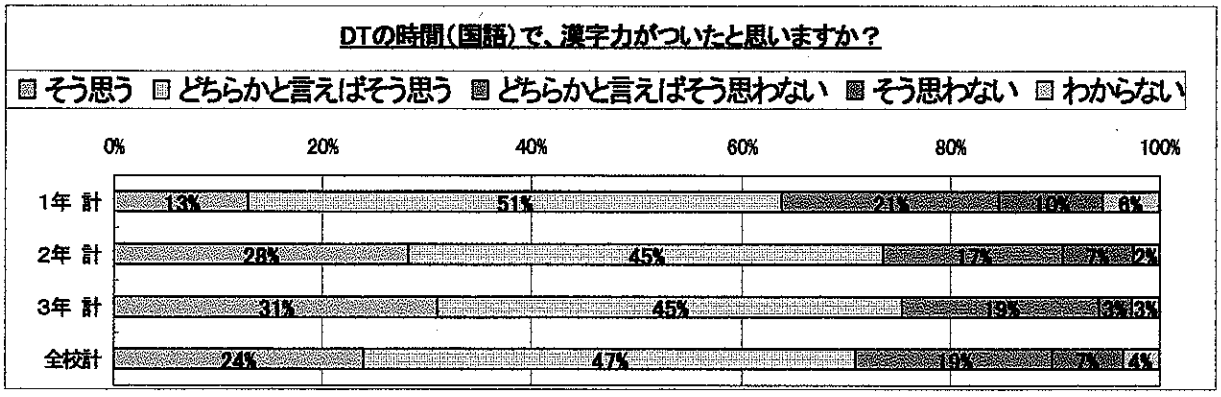
課題の内容

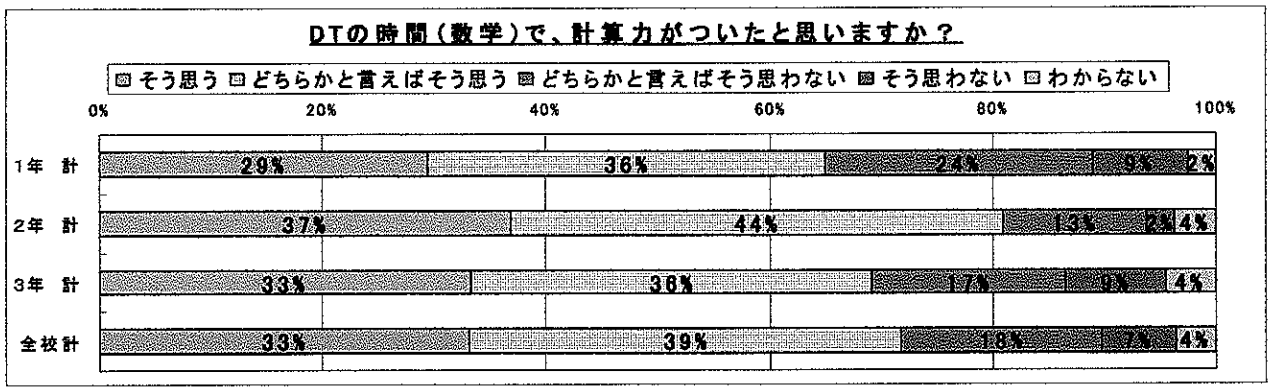
国語…全学年共通で、学習配当漢字の小学校３年生から始めた。
数学…各学年で、授業に即した計算問題
英語…各学年で、授業に即した単語や基礎構文

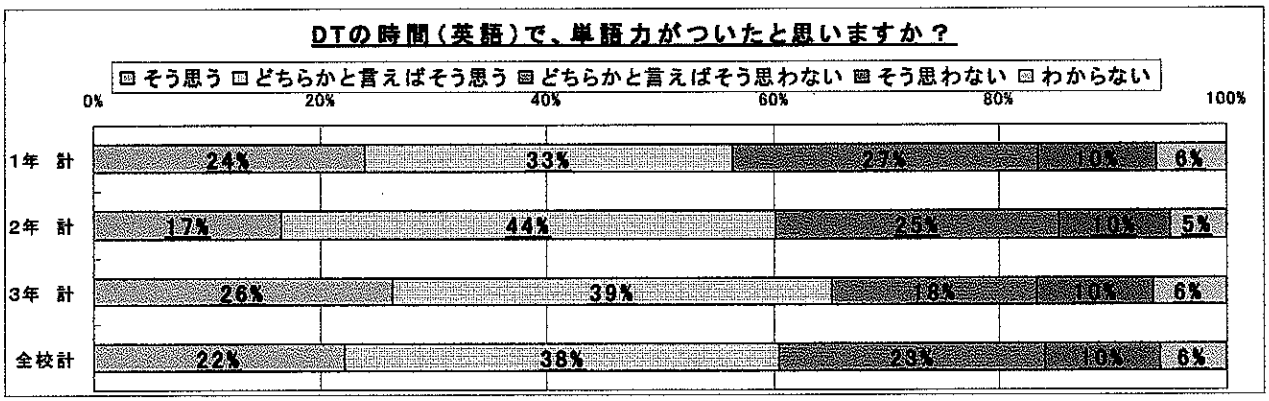
・10 分間という短時間であるが、毎日の学校生活のリズムの中に明確に位置づけられ、生徒にとっても、教員にとっても無理なく取り組める時間となっている。学習習慣を身につけさせ集中力を高める効果もあった。
・各教科とも「基礎を身につける」ということに徹した内容で、当初の目標を達成できた。
・漢字では、年度初めの学習配当漢字の学年ごと習熟どの確かめテストを行なって、ドリルタイムの課題づくりに活かすなどどの教科でも生徒の実態に即した課題づくりを行なうことができた。

資料　学習アンケート結果（全校生徒対象　平成 15 年 12 月実施）









ii　今後の課題

この取組のめざすところは、生徒一人一人が今の自分にとって必要な教科やレベルを選んで、一人一人にあった基礎学力の向上に努めることである。しかし、今年度は、最初の年ということもあって、取組を軌道に乗せ、学習習慣の定着に重きを置いた。そこで、全員が同じ教科の同じ課題を行なうということになった。生徒の学習意欲の向上や習慣づけという点では、十分に目的を果すことができた。今年度実践しての課題としては、今後いかに個々に応じた方法や内容を工夫改善するかということである。これは、生徒、職員の一致する要望である。生徒の学習意欲をより向上させるべく一人一人が満足できるような選択教科となるよう努めたい。

○学び方の習得を図る指導の工夫

「ＳＴＵＤＹ　ＧＵＩＤＥおよび学習シラバスの作成と活用」

学習意欲の向上と学習方法の定着をめざして、全学年全教科で、４月に「ＳＴＵＤＹ　ＧＵＩＤＥ」、２・３学期のはじめに「学期の学習シラバス」を作成配布し、各教科の授業で説明する時間を十分に取った。また、教科によっては、単元の初めには、見直し単元の見通しを持たせることに努めた。

i　研究の成果

本校の生徒の学力向上にとって、「学び方の習得」は大きな課題である。勉強が好きな生徒は、２割ほどであるが、勉強は大切だと思っている生徒は８割以上いる。みな勉強ができるようになりたいという希望は持っている。基礎基本が十分に身についていない生徒が多いということもあるが、「勉強の仕方がわからない」「何をやっていいのかわからない」「この勉強は何のためにや

っているのだろう」「この学習で何が身につくだろう」と思っている生徒が多いように思う。

そこで、各教科の学習のしかたや学習の予定を理解させた上で授業に臨ませることにより、学習に対してより自主的・積極的に取り組めるようになると思う。

学校としての取組とし、全学年全教科で実施したことにより、生徒にも受け入れやすかったと思う。また、学習シラバスについては、学習予定や評価内容や評価方法も盛り込み、学期の最初の授業で説明したことにより、生徒への授業に対する意欲が高まった。

ii　今後の課題

あるひとつの形式を示し、学校全体の取組として始めたわけであるが、ＳＴＵＤＹ　ＧＵＩＤＥも学習シラバスも、その内容や項目をより工夫改善していかなければならない。また、提示の時期や回数（年間通して、学期ごとに、単元ごとに）なども研究すべきところであろう。改善を図りながら、継続して実践することが大切であると思うので、来年度の大きな課題のひとつである。

○課題解決力の育成を図る工夫

「選択ＭＴ（マイタイム）」

i　研究の成果

・選択ＭＴにおいては、異学年の生徒やゲストティーチャーとの交流により、積極的な活動をする生徒が多く見られた。また、意欲的に取り組む姿が多く見られる。
・ゲストティーチャーの方々の専門的かつ、熱心な指導に生徒の意欲も高まっている。
・浦安市では、前年度より学校支援ボランティアを募り、リストを作成した。ゲストティーチャーを招聘するにあたり、学校それぞれに探すことは大きな負担であったので、この事業はたいへんありがたいものであった。
・学年の発達段階の違いを考慮して２・３年生での実践となり、課題の設定等の問題が解決された。

ii　今後の課題

・生徒の興味・関心が多岐に渡っているが、すべてに対応するためには、教員数・場所・用具など多くの問題がある。人数に偏りなく、生徒の希望を生かす内容をいかに設定するか、十分な検討が必要である。
・選択させるにあたってのガイダンスの方法の検討も課題となる。
・ゲストティーチャーの支援を受けることの効果は非常に大きいものであるので、ゲストティーチャーとの円滑な連携も今後ますます考えていかなければならない。例えば、事前の打ち合わせを十分に行うことが大切であるが、時間確保が難しい現状がある。また、学校として、活動の目標や意図を明確にしておかないと、任せっきりになったり、十分に活動していただけなかったりすることになってしまうことからも、指導のねらい等を十分に打ち合わせを行う必要性を感じる。

○学力向上に向けての実態把握

「学習と生活のアンケート等学力向上に関する意識調査」

i　研究の成果

昨年と同様のアンケートの実施によって、本校生徒の学習や生活の様子、また、学習に対する意

識を数値としてはっきりつかむことができ、現段階における問題点を全職員が客観的に把握することができた。また、昨年との比較により生徒の変容を知ることができた。さらに、今年度は、学区の小学校（２校）や市内の中学校（２校）にも同じアンケートを依頼し、相互に比較・考察することができた。特に、学力向上には小学校との連携が欠かせないものであると考え、小学校との情報交換会を行なうなど、相互に理解するところから連携を深めつつある。

保護者や地域の理解や協力を仰ぐ資料としても、さまざまな場面で結果を公表し、具体的に本校生徒の実体を捉えていただくことができたように思う。

ii　今後の課題

生活の様子や意識についての把握はできたが、学力の把握がまだ不十分であるので、測定の方法の検討も含めて、今後の課題となっている。また、変容を測る資料として今後も継続し、よりよい活用方法を考えていきたい。

Ⅳ．学力把握のための学校としての取組

・千葉県標準学力検査の実施（全学年・年１回・４月実施）
・千葉県学力調査（２学年・２月実施）

Ⅴ．フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１．研究実践の紹介

・算数・数学　習熟度別指導　（「日本教育新聞」　６月２７日版　）
・シリーズ学校訪問「学力向上フロンティアスクールとしての取り組み」
（　「浦安新聞」　７月１１日版　）
・今、学校で～少人数指導　（　千葉テレビ放送　　１１月１２日放映　）
・子どもに確かな学力を　（「教育うらやす」　浦安市教育研究センター　１１月　第４号　）
・〈少人数習熟度別指導〉の効果的な取り組み（「総合教育技術」　１月号　　小学館　）
・研究実践報告
　①　船橋出張所管内教育課程協議会　８月　５日
　②　浦安市教務主任研修会　　８月１９日
　③　教育ミニ集会　　１０月２８日
　④　浦安市教育実践発表会　　２月１０日

２．学校視察来校

・八日市場市立第一中学校　　２名　（　６月　２日）
・千葉市新任教頭研修会　　１４名　（１０月２９日）
・船橋地区学力向上推進協議会　　７名　（１１月１８日）
・大阪府箕面市教育委員会　　１名　（１１月２８日）
・山形県河北町立河北中学校　　４名　（　２月　６日）
・旭市立第二中学校　　１名　（　２月１９日）
・山形県山辺町立山辺中学校　　４名　（　２月２５日）

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☐ １５年度からの新規校　☑ １４年度からの継続校

【学校規模】　☐ ３学級以下　☐ ４～６学級
☐ ７～９学級　☐ １０～１２学級
☑ １３～１５学級　☐ １６学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　☑ Ｔ．Ｔによる指導
☐ その他

【研究教科】　☑ 国語　☐ 社会　☑ 数学　☐ 理科
☑ 外国語　☐ 音楽　☐ 美術　☐ 技術・家庭
☐ 保健体育　☐ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　☐ 無